14 シラコバト …… ハト科

10年前の平成14年度の調査では、「88メッシュから178件」の調査結果を受け、「越谷から激減」と報告した。今回は、「20メッシュから27件」の調査結果を得た。さらに、目撃されたメッシュを見るとそれぞれが島状に分散しており、連続していない傾向にある。また、発見報告者からの聞き取りによると、目撃数は１メッシュに１羽あるいは２羽とのことである。当然、繁殖の可能性も低くなる。以上のことから、シラコバトは越谷から絶滅寸前であると報告する。

市民は、国の天然記念物「越ヶ谷のシラコバト」に特別の思いがある。越谷からの絶滅を防ぐには、生息環境の保全を進めつつ、人工的な保護・増殖も必要の段階に来ている。留鳥。

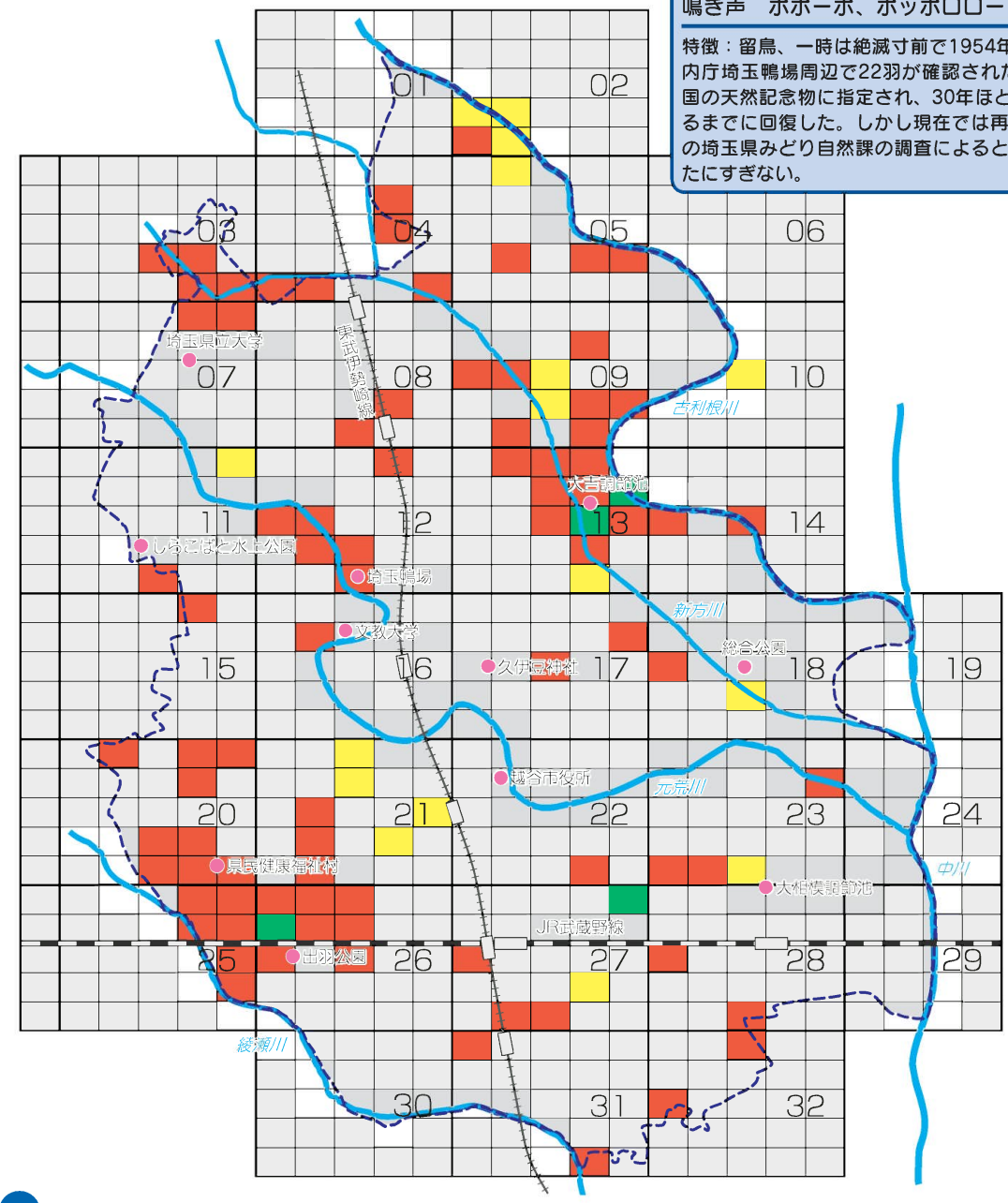
（山部直喜）

埼玉県レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類（2008）

環境省レッドリスト絶滅危惧ⅠB類（2012）

鳴き声　ポポーポ、ポッポロロー

特徴：留鳥、一時は絶滅寸前で1954年の調査によると越谷市の宮内庁埼玉鴨場周辺で22羽が確認されたにすぎなかった。その後、国の天然記念物に指定され、30年ほど前には約１万羽と推計されるまでに回復した。しかし現在では再度激減に転じ、平成24年度の埼玉県みどり自然課の調査によると、繁殖期に24羽が報告されたにすぎない。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

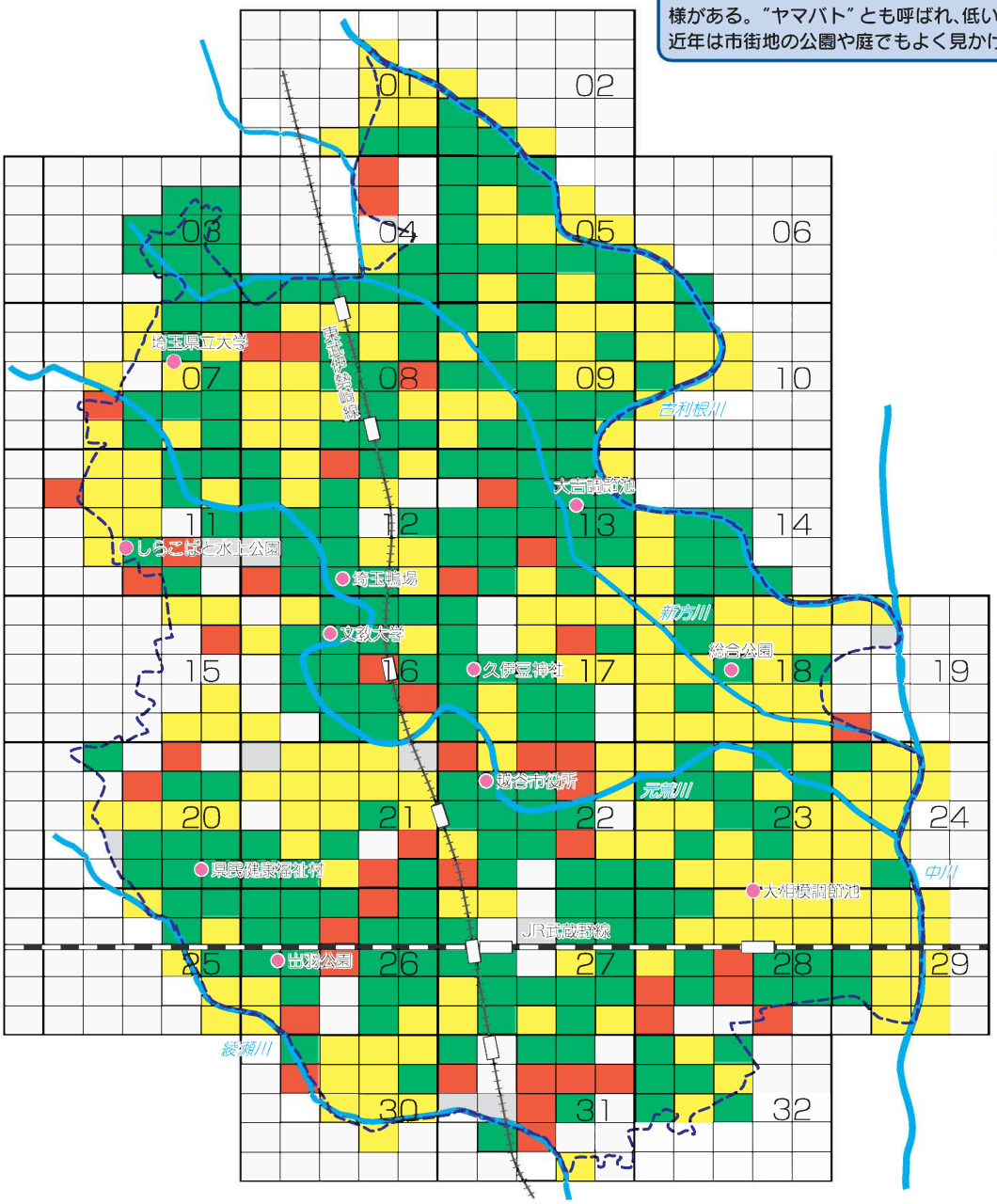
15 キジバト ……ハト科

第１次の調査以来、報告メッシュ数、発見報告総数は常に１位か２位である。かつての「ヤマバト（山鳩）」も、それだけ身近な鳥になった証拠といえる。平成14年度は「288メッシュから885件」、そして今回は「456メッシュから1,874件」と報告された。市内どこででも見ることができるといってよい。同じハトでもシラコバトの減少ぶりとキジバトの増加ぶりを比較すると、あまりにも対照的な結果に驚くばかりである。

また、南越谷駅や大吉調節池のキジバトを観察していると、ヤマバトと呼ばれていた頃と比べ、人との距離が縮まってきたように感じている。なお、浅草の観音様や駅のプラットホームで近づいて来るハトは、もともと家禽(かきん)のドバトである。留鳥。（山部直喜）

鳴き声　ゼゼッポポー

特徴：留鳥、全長33cm。ドバトより少し小さく、背中は灰褐色、頭から腹にかけて淡い褐色をしていて、首の横には灰青色のしま模様がある。"ヤマバト"とも呼ばれ、低い山地や林に生息しているが、近年は市街地の公園や庭でもよく見かける。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

16 コサギ …… サギ科

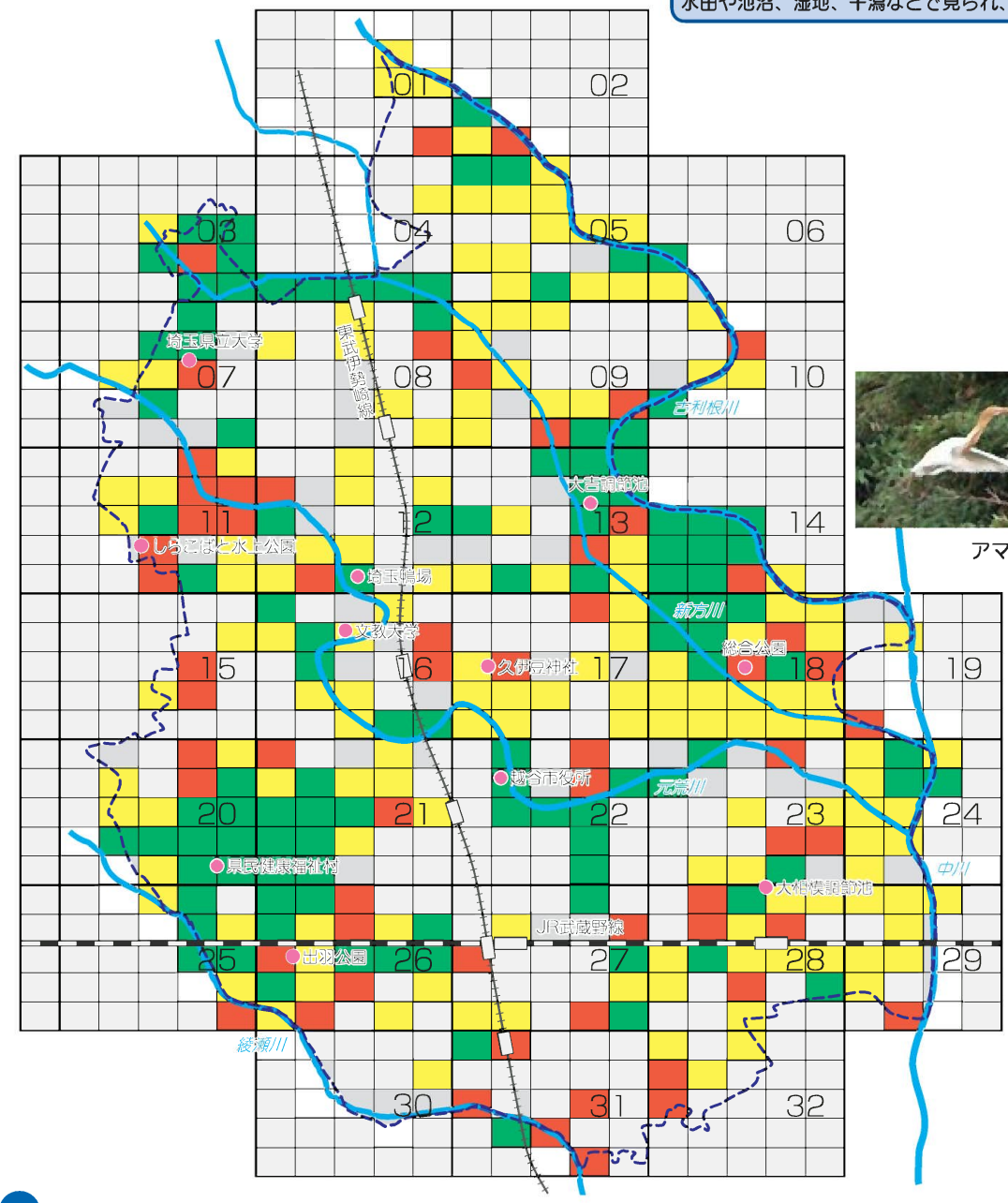
近年、バードウォッチングを楽しんでいる人から「コサギが少なくなった」という話を聞くことが多くなった。確かに、特に冬季の調査で市内を歩いているとその傾向を感じる。替わって、ダイサギやアオサギの増加ぶりが目立つ。中島３丁目のダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギが混在する集団繁殖地でも、コサギの営巣は以前と比べて目立たない。

しかし、平成14年度の報告と今回を比較してみると「172メッシュから448件」、そして「260メッシュから910件」と報告メッシュ数、発見報告総数とも大幅に増加している。この矛盾した結果を説明できないが記しておきたい。留鳥。

（山部直喜）

鳴き声　ゴァーッ、ゴァーッと鼻声で鳴く

特徴：留鳥、全長61cm。全体が白色で、くちばしと足が黒色、指は黄色。夏羽は頭に長い飾り羽、背にはカールした飾り羽をもつ。水田や池沼、湿地、干潟などで見られ、魚や両生類を食べる。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

アマサギ（左）とゴイサギ（右）：中島にて

17 カルガモ …… カモ科

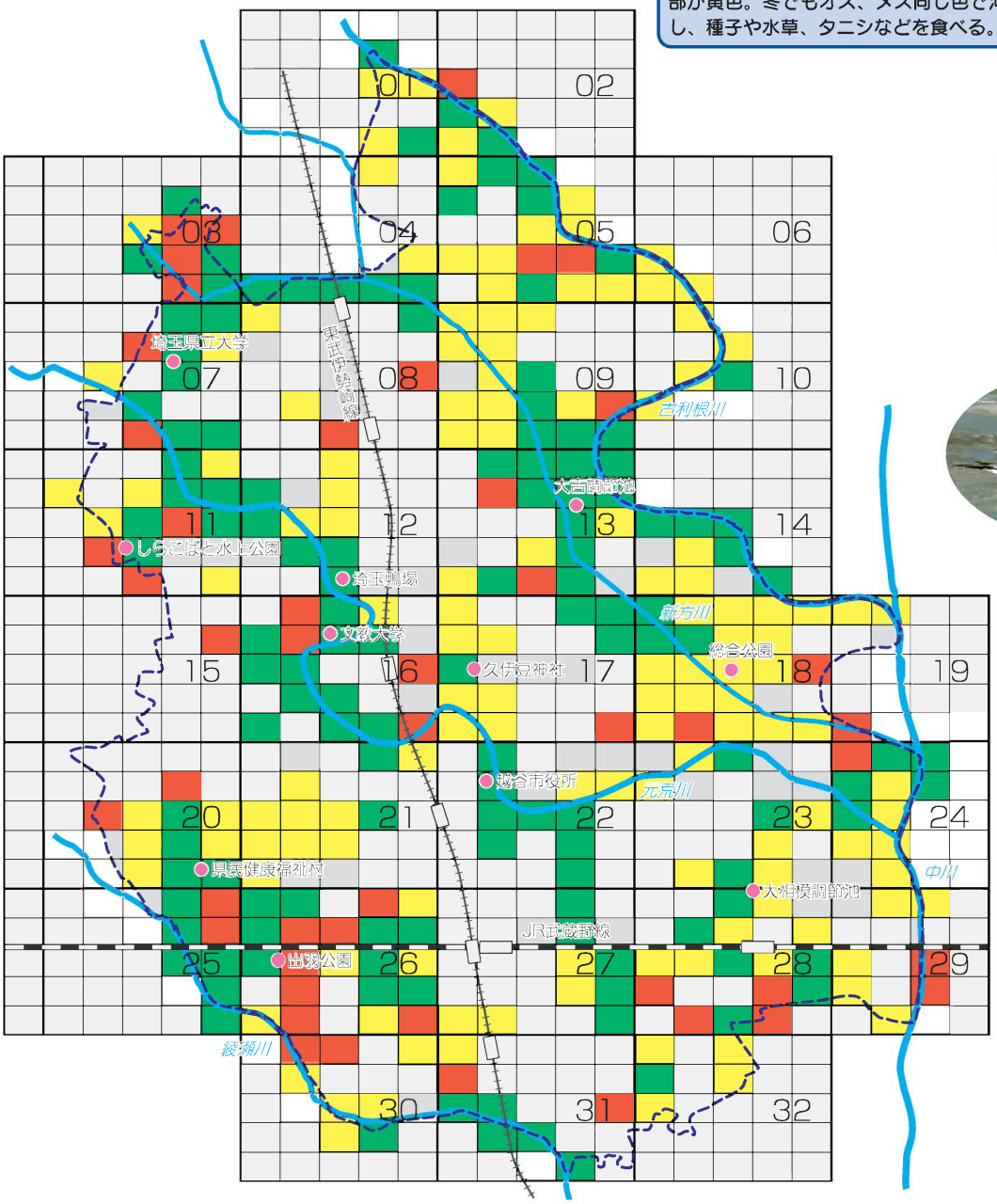
今回の調査報告「271メッシュから1,349件」の結果は、平成14年度の「181メッシュから700件」と比較すると増加しているといえる。越谷では繁殖も確認されており、市内の代表的な河川や調節池では１年を通して見ることができる。

しかし、調査で市内を歩いていると数が少なくなっていることを実感する。少なくなっているのはカルガモだけではない。100羽単位で見られたオナガガモなども気を付けて探さないと見落としてしまうほどだ。日本野鳥の会東京からも、都下のカモ全体が減っていることが報告されている。

報告数は増加したが、生息数の増加を感じないのはコサギと同様である。留鳥。（山部直喜）

鳴き声　グエッグェッ

特徴：留鳥、全長60cm。大型の淡水ガモで、全体に黒褐色で頭は白っぽく、顔には２本の黒褐色の線がある。くちばしは黒色で先端部が黄色。冬でもオス、メス同じ色で河川や水田、湿地などに生息し、種子や水草、タニシなどを食べる。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

オナガガモ

18 カワセミ …… カワセミ科

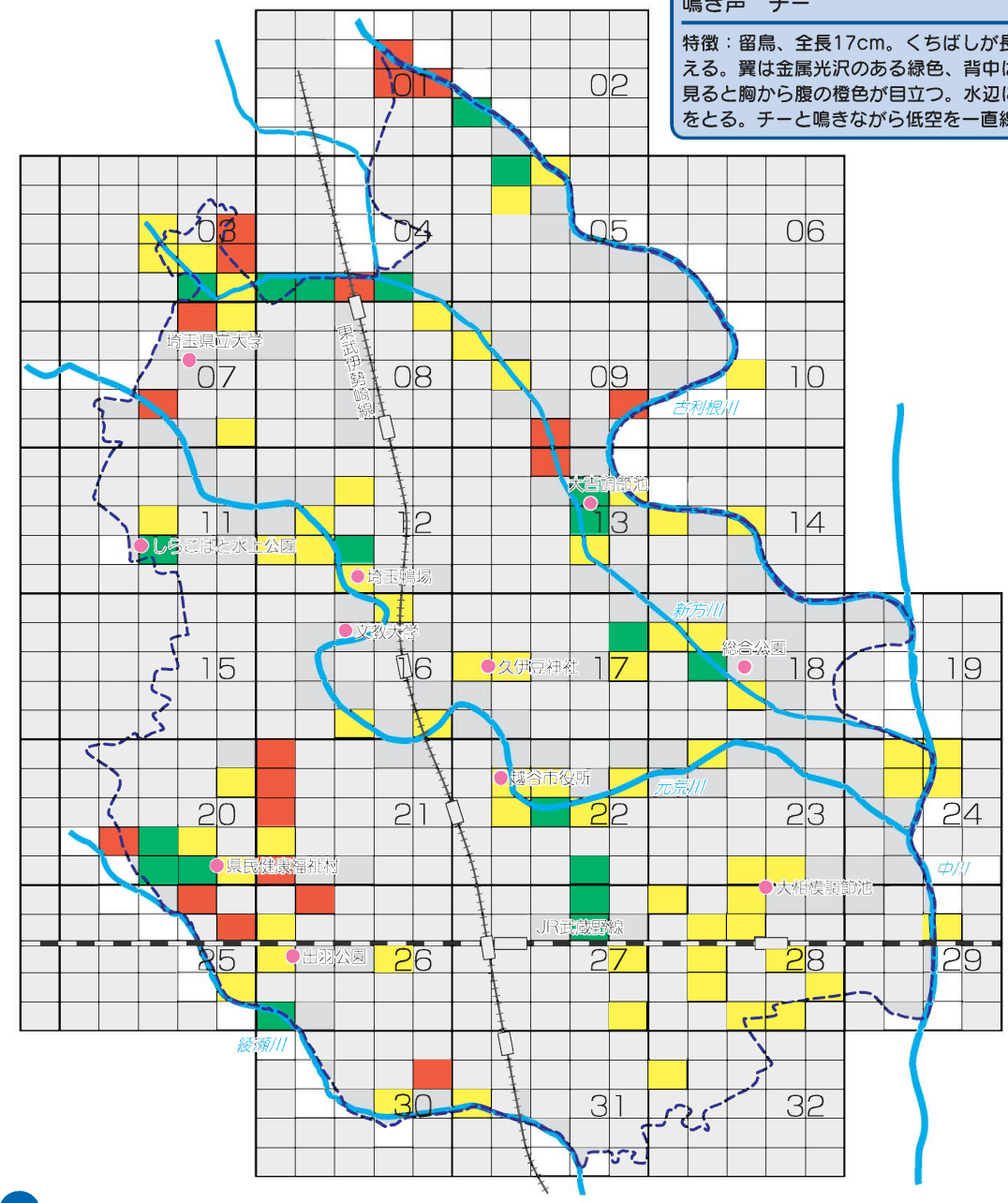
「翡翠(ひすい)」の字をあててカワセミと読む。もともとは清流に棲む鳥で、翡翠色に光りながら飛ぶカワセミはまさに宝石。その美しさにゆえにバードウォッチングや写真撮影を始めた人も多い。人気もあり注目度も高いので、平成19年度より指標生物に加えた次第である。今では、コゲラ、シジュウカラと共に都市部への進出が目立つ。

その進出ぶりは、指標生物にくわわった19年度報告「41メッシュから125件」と比較すると、今回「87メッシュから380件」と２倍以上の増加である。特に発見報告総数の増加が目立つのは、報告者がカワセミに魅せられて、何度も足を運んだことと推察する。市内の川や大きな池のある公園で、大砲のような望遠レンズが並んでいる所は、必ずと言っていいほどカワセミが生息している。留鳥。　（山部直喜）

埼玉県レッドデータ絶滅のおそれのある地域個体群（2008年）

鳴き声　チー

特徴：留鳥、全長17cm。くちばしが長い分、スズメより大きく見える。翼は金属光沢のある緑色、背中はコバルトブルー、正面から見ると胸から腹の橙色が目立つ。水辺にすみ、ダイビングして小魚をとる。チーと鳴きながら低空を一直線に飛ぶ。



19年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
19・24年度報告あり

19 コゲラ …… キツツキ科

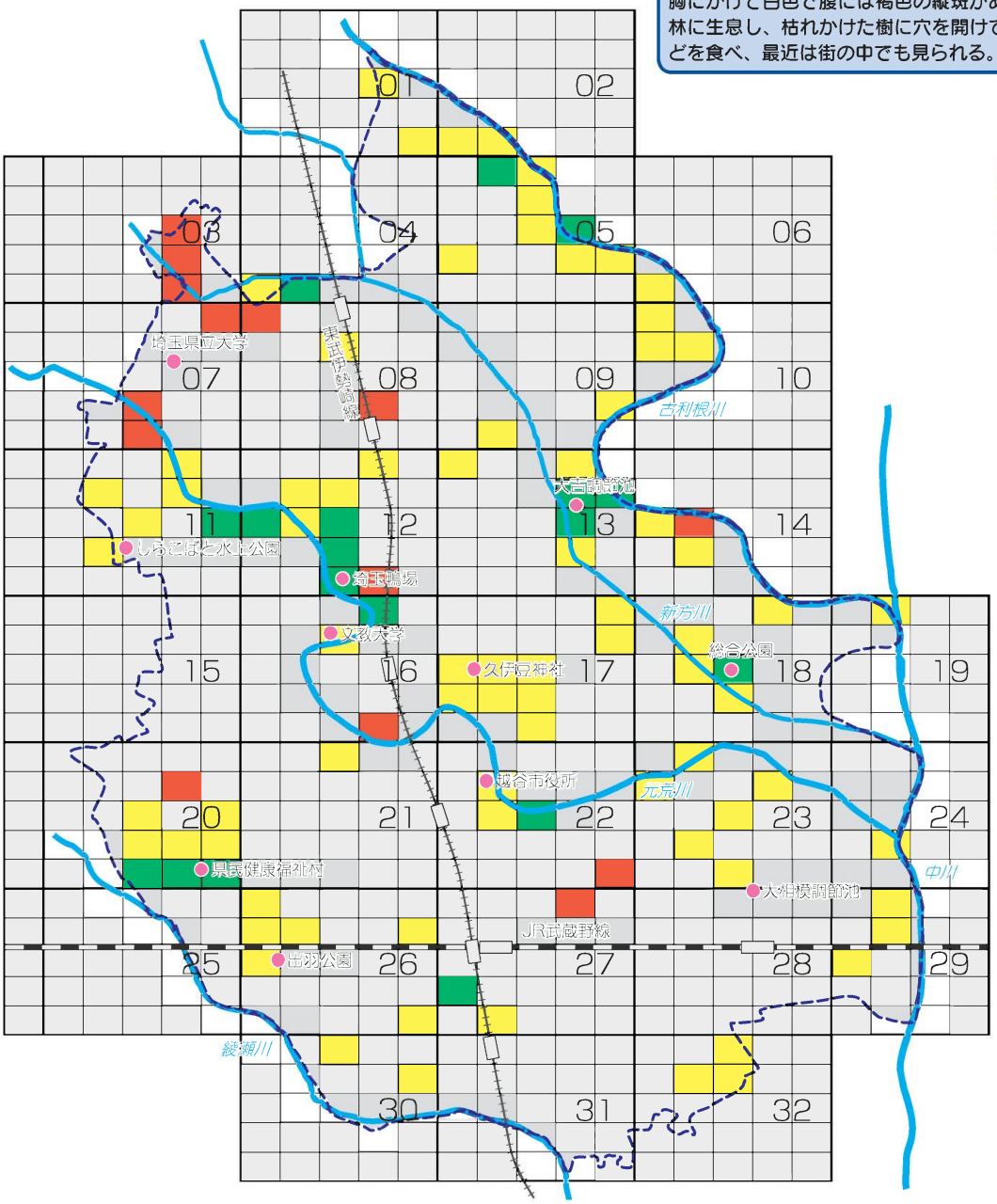
日本で最も小さいキツツキで、都市部への進出が続いている。越谷での進出も、平成14年度「32メッシュから74件」、今回「95メッシュから232件」の報告がそれを裏付けている。

今では、住宅地の中のちょっとした公園でも、あの「ギー」という特徴的な鳴き声で気づくことが多い。この声を増森橋付近の街路樹で聞いたときには、声だけでは信じられず姿まで認めて「街路樹まで来るようになったか」と驚いたものである。

繁殖期には、以前からの宮内庁埼玉鴨場付近や久伊豆神社だけでなく、屋敷林や大きな公園でも巣立ち雛を観察できるようになってきた。留鳥。（山部直喜）

鳴き声　ギィーッ、ギィーッ

特徴：留鳥、全長15cm。スズメぐらいの大きさで、日本で一番小さなキツツキ。体は褐色で背中と翼に白い横じまがあり、のどから胸にかけて白色で腹には褐色の縦斑がある。主に山地から平地の森林に生息し、枯れかけた樹に穴を開けて巣を作る。昆虫や木の実などを食べ、最近は街の中でも見られる。



- 14年度のみ報告あり
- 24年度のみ報告あり
- 14・24年度報告あり

20 ツバメ …… ツバメ科

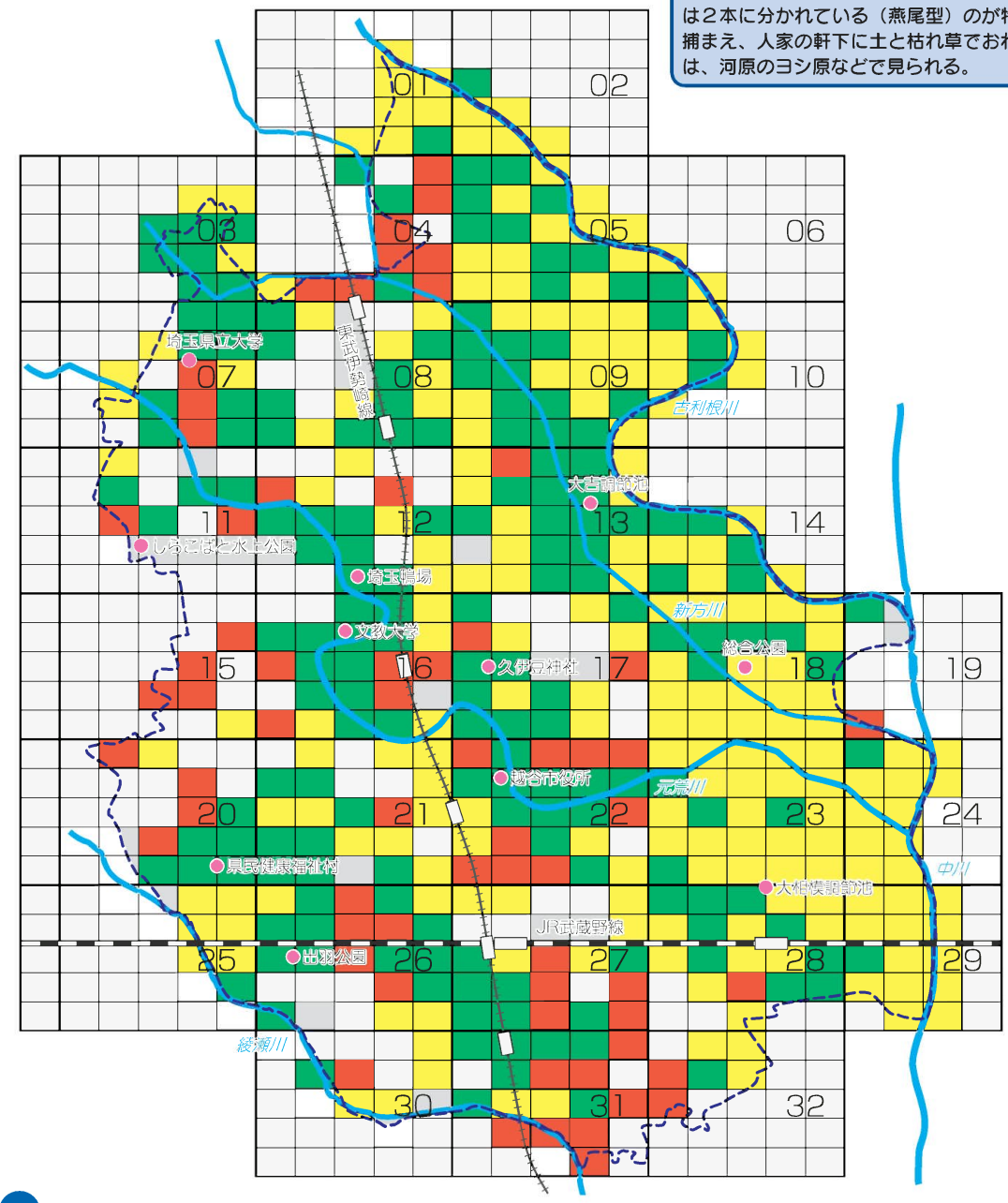
ツバメが、ここ越谷で観察されるのは３月末から秋口にかけてである。限られたこの期間しか見られないにもかかわらず、第１回の調査以来、報告メッシュ数、発見報告総数は常に第３位の位置を占めている。やはり、ツバメは古来より人との結びつきが強く、親しまれているからであろう。

また全国的には、生息数は減少傾向にあるといわれている。しかし、本調査では回数を重ねるごとに報告メッシュ数、発見報告総数とも増加している。平成14年度と比較しても、「246メッシュから607件」から、今回「388メッシュから1,241件」である。

なお近年、夜間の繁華街などで照明に集まる昆虫を採餌している姿を観察することがある。夏鳥。（山部直喜）

鳴き声　ピチュピチィチュピチュピリリリ

特徴：夏鳥、全長17cm。ツバメほど身近な鳥としてかわいがられてる野鳥はいないだろう。頭と背中は黒色、額とのどは赤褐色、尾は２本に分かれている（燕尾型）のが特徴。飛んでいる虫を空中で捕まえ、人家の軒下に土と枯れ草でおわん型の巣を作る。巣立ち後は、河原のヨシ原などで見られる。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

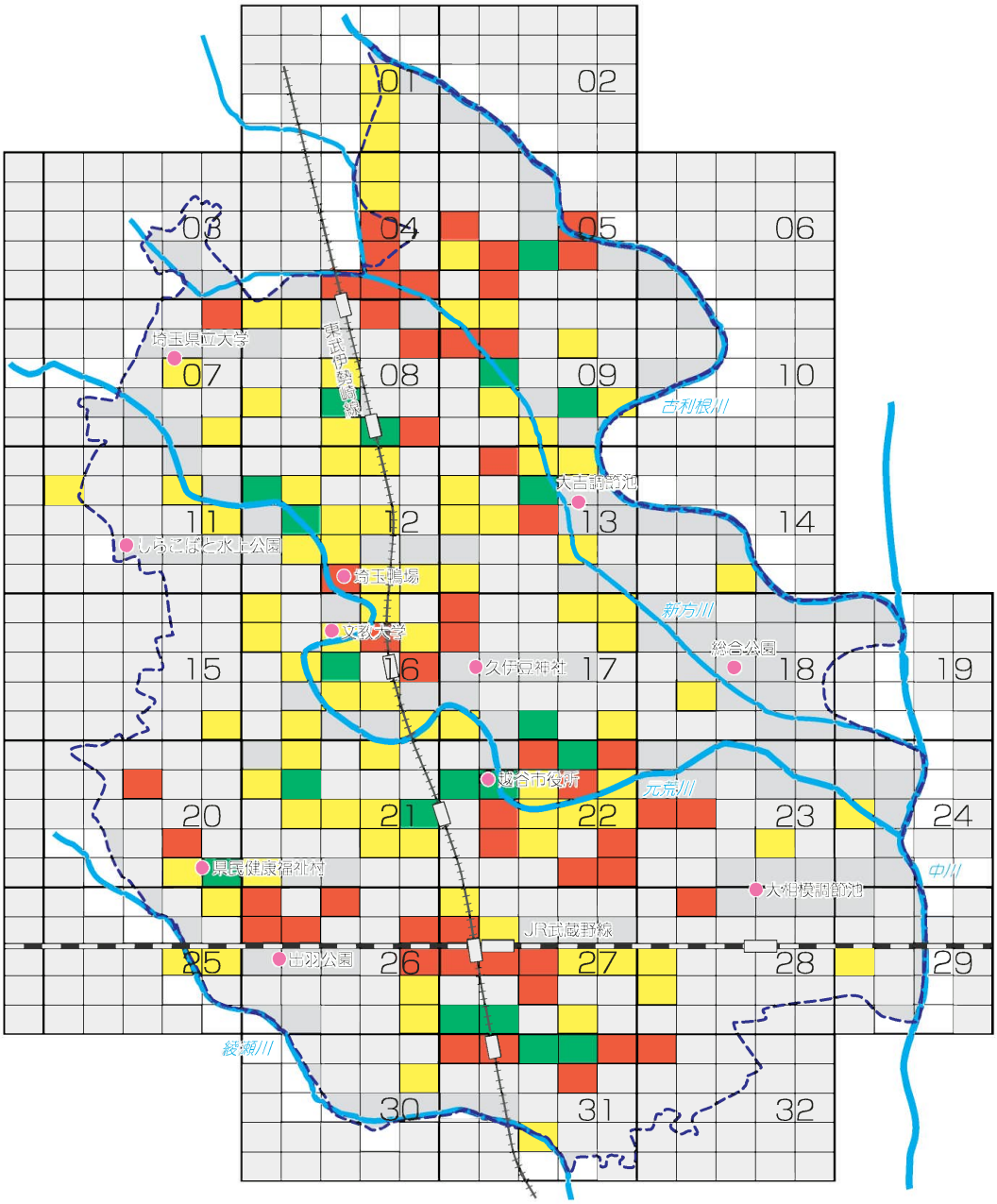
21 ツバメの巣

越谷で生まれたツバメは、越谷が生まれ故郷である。だから、平成14年度「72メッシュから118件」、今回「109メッシュから220件」の増加報告はうれしい。

一番の天敵はカラスである。近年はカラスがより住宅地へ進出してきたためか、より奥まった住宅密集地や玄関のひさしの内側に巣をかける例が増えている。

鳥インフルエンザについては、ツバメから人間に感染することは考えられないそうだ。また環境省は、「高濃度の放射線物質の汚染された巣であっても、50cm以上離れれば自然放射線量と同等になり、人体に影響はない」と正式に発表している。

（山部直喜）



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

22 ハクセキレイ …… セキレイ科

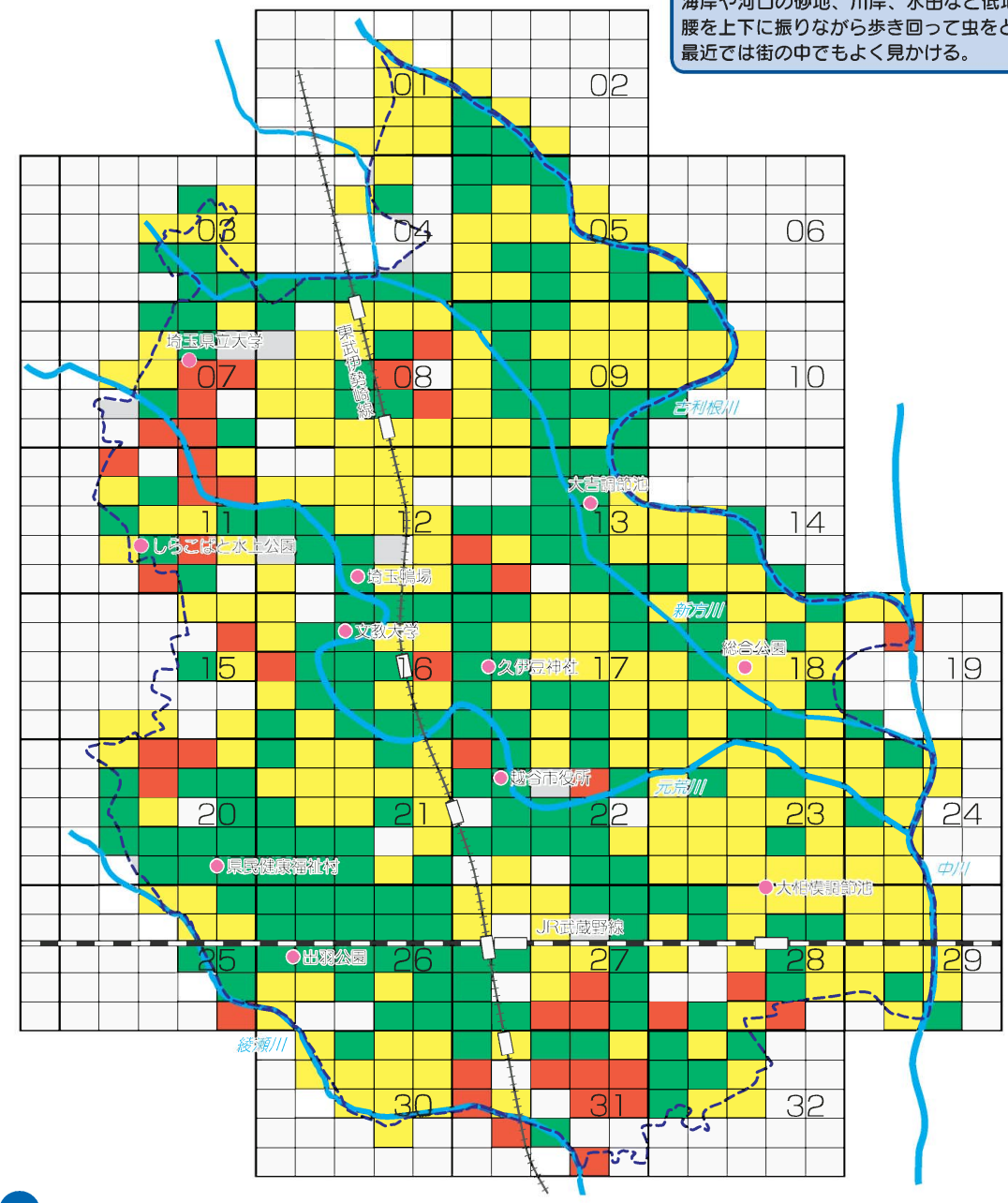
平成９年度の第１回調査以来、報告メッシュ数、発見報告総数を常にキジバトとトップを争っている。今回の報告総数はともに最多の「465メッシュから1,949件」であった。それだけ、調査対象の野鳥の中では最も身近であるといえる。

もともとは水辺の鳥であったはずなのに、今では住宅街、商店街にも進出しており、市内どこにでも生息しているといえるだろう。特に、市内最大のモール街ではその密度が高い。

そこでの営巣場所を見ていると、店の入り口に近い所、あるいは車や人がひっきりなしに通る所を選んでいるようにもみえる。それは、カラスからの攻撃を防ぐために、人と近い所で営巣するツバメを連想する。留鳥。　（山部直喜）

鳴き声　チチッチチッ

特徴：留鳥、全長21cm。スズメより大きく、白色と黒色の模様をしていて尾は黒色、外側の尾羽は白色。また、くちばしと足は黒色。海岸や河口の砂地、川岸、水田など低地の水田で生息し、地上では腰を上下に振りながら歩き回って虫をとる。飛ぶときは波形を描く。最近では街の中でもよく見かける。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

23 モズ …… モズ科

越谷では夏にモズの姿はまず見ない。多くの個体が高原などに移動していると思われる。それでもわずかであるが、繁殖期にごく限られた地域で観察されることがある。今回、私は東町５丁目と平方で生息を確認できた。前者では、幼鳥が親に餌をねだる行動も観察できた。

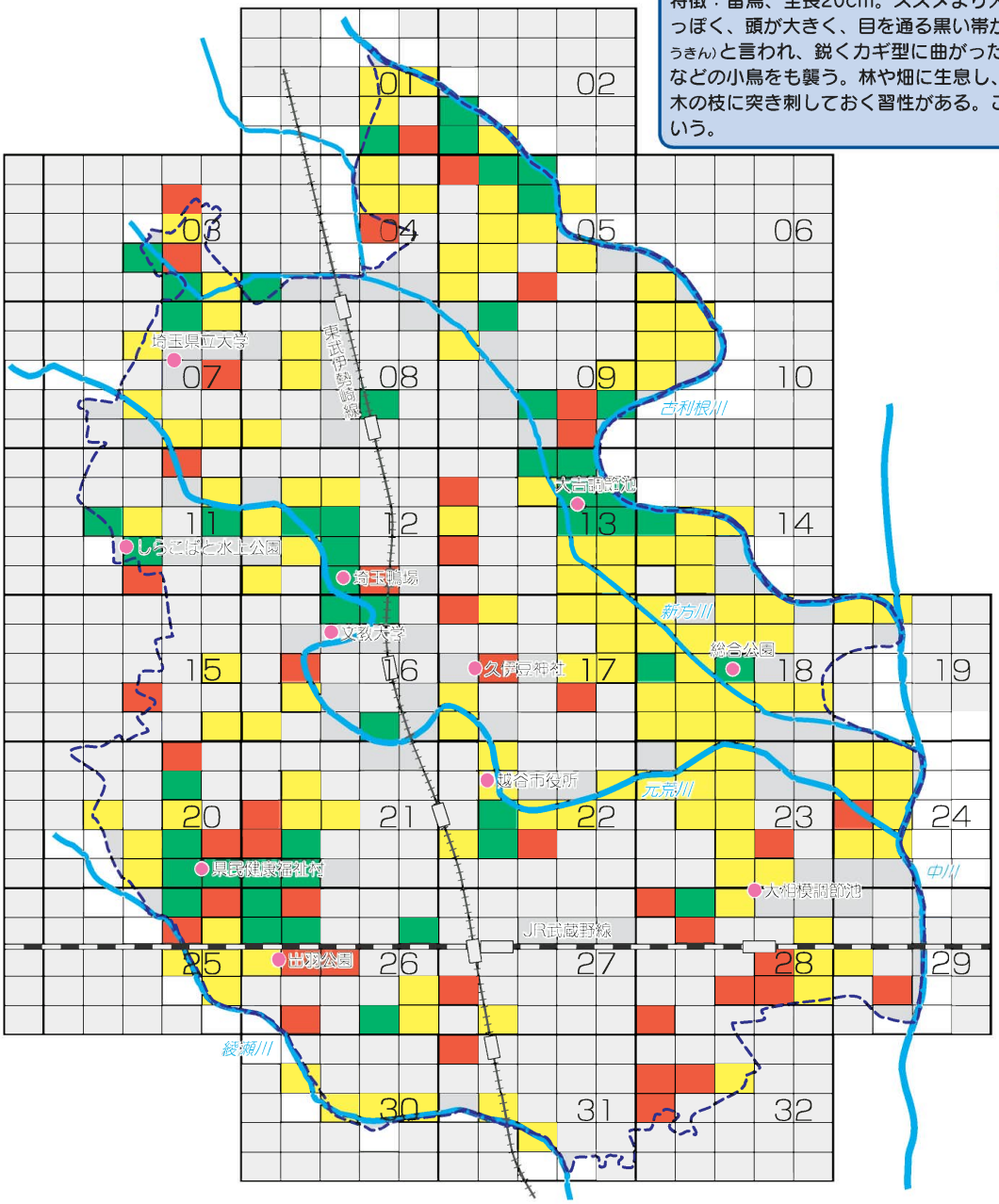
９月の中旬になると平地に降りてきて、電線や高い木のてっぺんに止まり、「高鳴き」をする姿が目立つようになる。「キィーキィーキィー、キキキッ、キィーキィー」とよく響き渡る。「高鳴き」する場所は、稲刈りの終わった田や畑が広がるところ、あるいは学校の運動場などだ。

調査報告は、平成14年度「93メッシュから182件」、今回「180メッシュから468件」と約２倍の増加である。留鳥。

（山部直喜）

鳴き声　キィーキィー。キョンキョン

特徴：留鳥、全長20cm。スズメより大きくて、くちばしや足が黒っぽく、頭が大きく、目を通る黒い帯がある。モズは小さい猛禽(もうきん)と言われ、鋭くカギ型に曲がったくちばしは、時にはスズメなどの小鳥をも襲う。林や畑に生息し、昆虫やトカゲなどの獲物を木の枝に突き刺しておく習性がある。これを〝モズのはやにえ〟という。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

24 ツグミ …… ヒタキ科

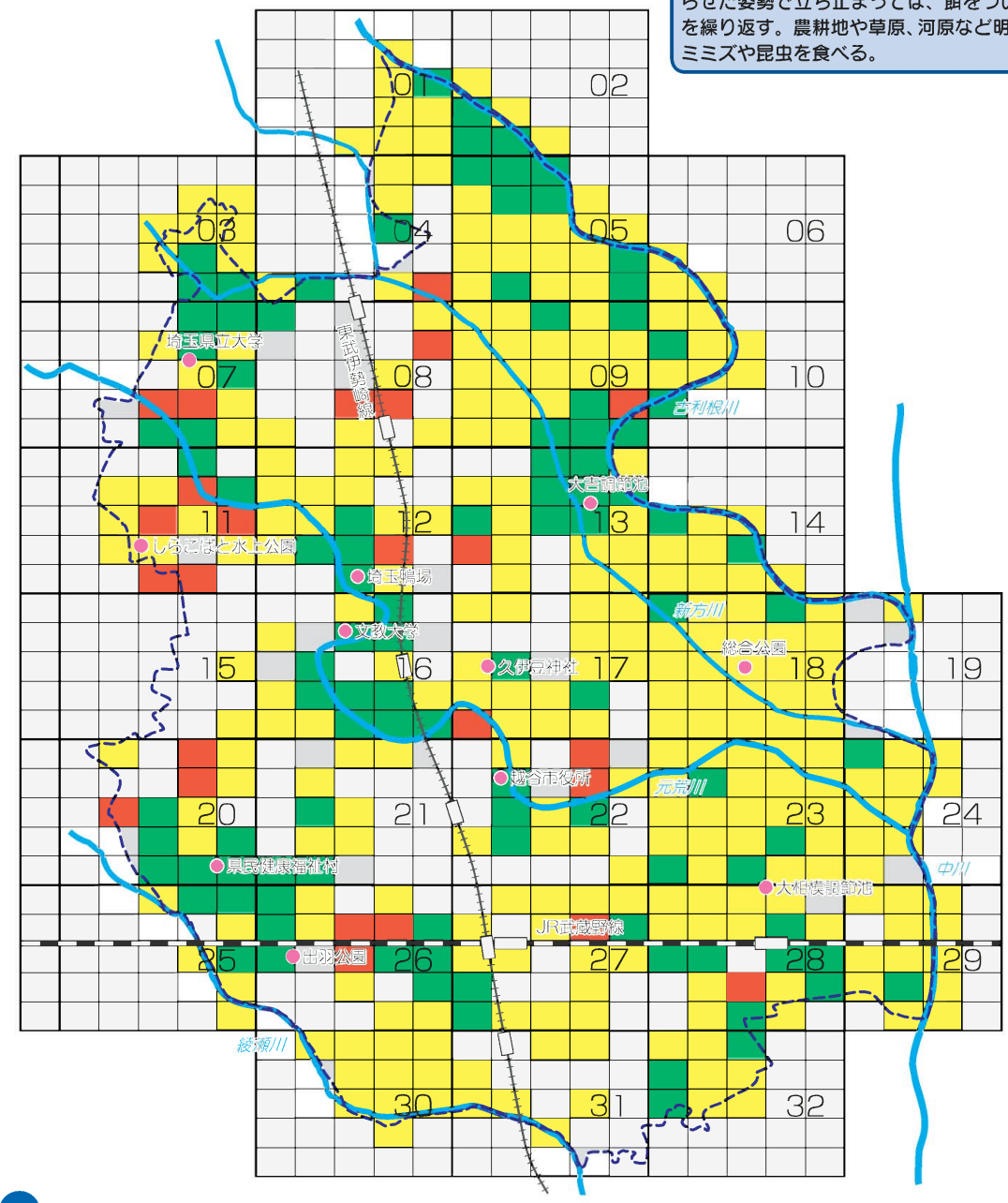
ツグミが越谷に姿を現すのは10月頃からで、５月の連休あたりまで観察することができる。11月の初旬頃が渡りの最盛期である。

特に12月、１月に調査した地域では、ほぼ確実に生息を確認することができた。また平成24年度の冬は、例年に比べツグミが多いようにも感じた。ここ越谷で見られる冬鳥の中で、最も身近な小鳥になったと思われる。

このことは、平成14年度の報告「130メッシュから264件」と、今回の「386メッシュから971件」との比較からもそのことを裏付けている。報告メッシュ数で約３倍、発見報告総数で４倍近い増加である。冬鳥。（山部直喜）

鳴き声　クェッ、クェッ、またはキィキィー

特徴：冬鳥、全長24cm。スズメより大きく、クリーム色のまゆ、胸の黒いボツボツ、栗色の翼が特徴。トントンとはね歩き、胸をそらせた姿勢で立ち止まっては、餌をついばみ、また歩くという動作を繰り返す。農耕地や草原、河原など明るい開けた所でよく見られ、ミミズや昆虫を食べる。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

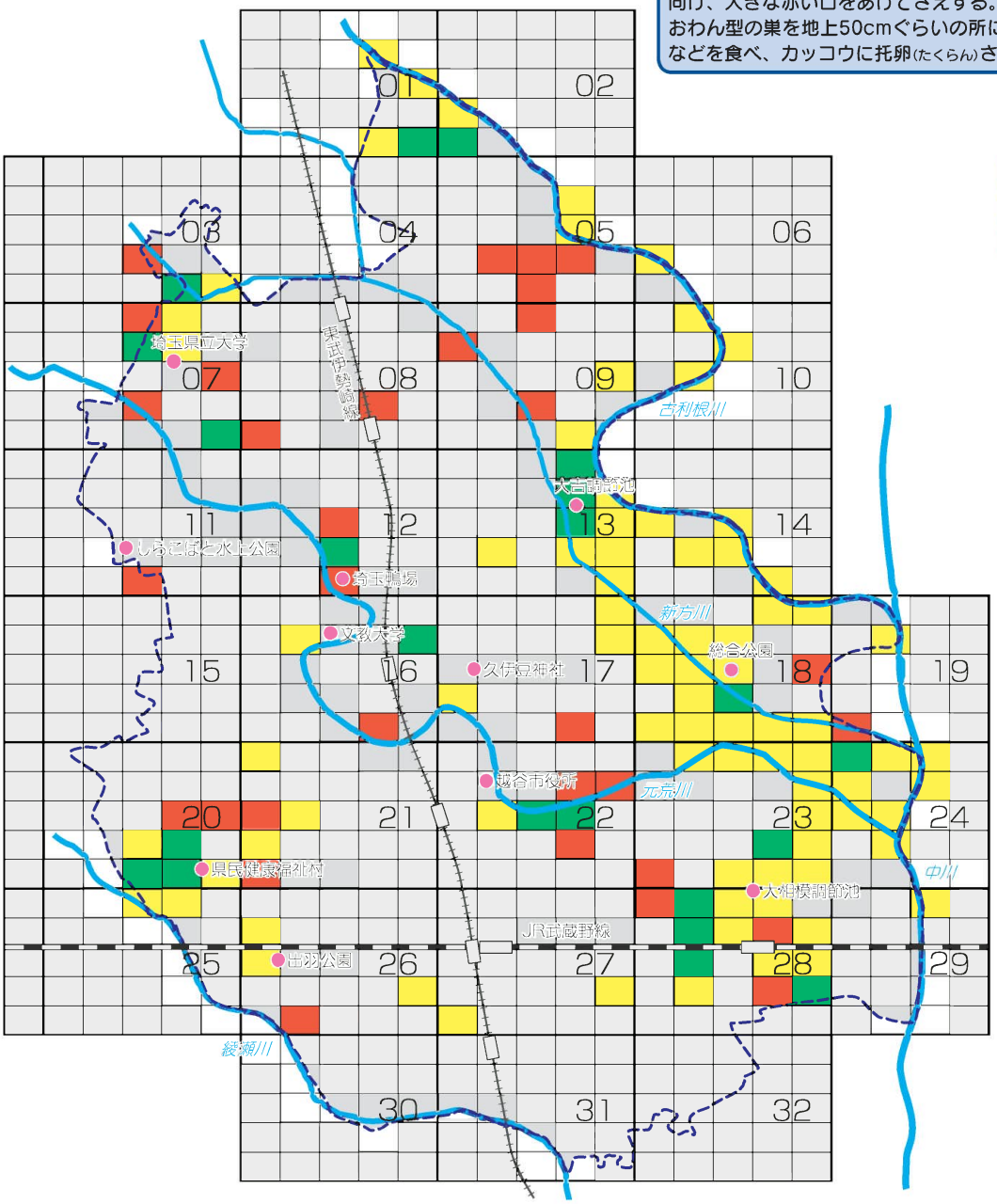
25 オオヨシキリ …… ヨシキリ科

越谷には、４月頃に飛来し９月頃までヨシ原を生活の場としている。したがって、ヨシが繁殖する水辺に沿っての報告が多い。その中でもヨシ原が広がる大吉調節池、大相模調節池、健康福祉村付近からは、特に多くの報告がなされている。初夏にはギョギョシ、ギョギョシとやかましくさえずる。地元の古老は、このさえずりをケケシ、ケケシと説明してくれた。一晩中さえずり続けることも多い。

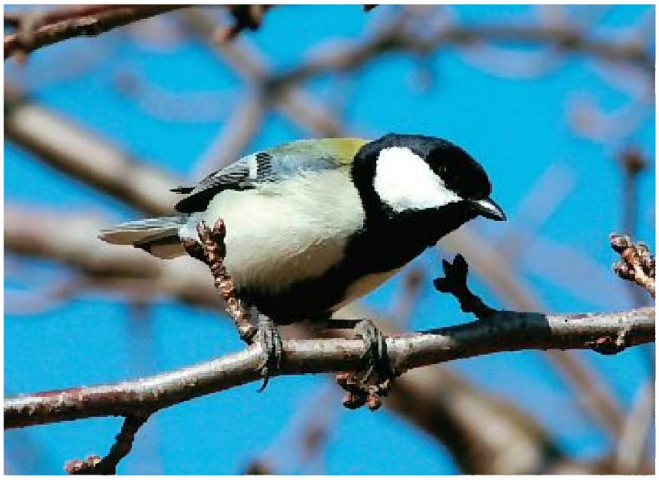
平成14年度は「54メッシュから107件」、今回は「105メッシュから292件」の報告がされており、報告メッシュ数、発見報告総数とも大きく増加している。夏鳥。　（山部直喜）

鳴き声　ギョギョシ、ギョギョシ、ケケシ、ケケシ

特徴：夏鳥、全長18.5cm。スズメより大きく、全身薄い茶色で目立たない。ヨシなどに縦に止まることが多く、くちばしを斜め上に向け、大きな赤い口をあけてさえずる。ヨシの茎を何本かたばねておわん型の巣を地上50cmぐらいの所に作る。ヨシにつく虫やクモなどを食べ、カッコウに托卵(たくらん)されることがよくある。



26 シジュウカラ …… シジュウカラ科



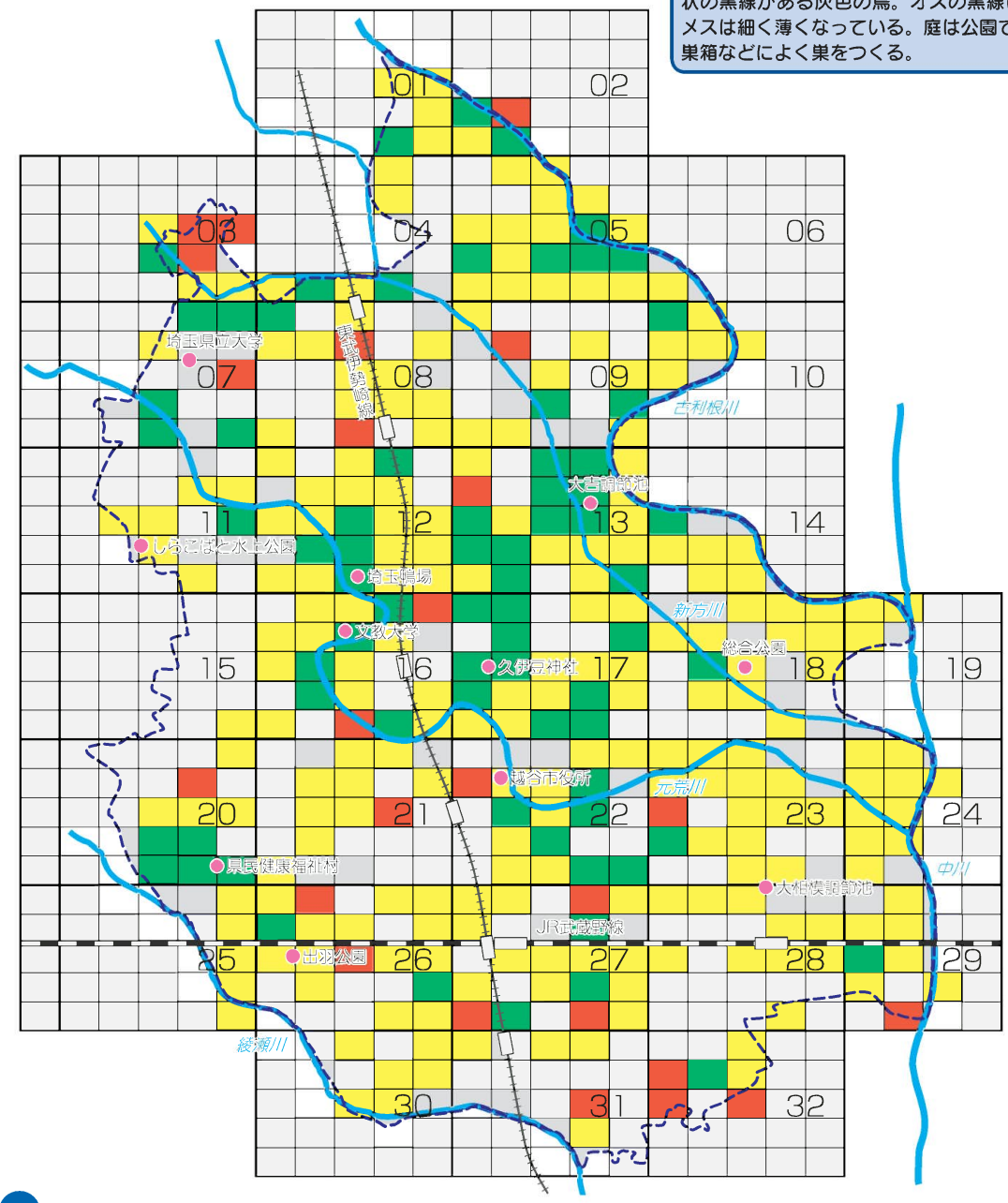
平成９年度に「ふるさといきもの調査」を始めて、最も都市部への進出が著しい小鳥である。そのことは、平成14年度報告「98メッシュから171件」、今回「300メッシュから1,022件」の増加ぶりからもよく分かる。

しかし数字よりも、分布図の黄色のメッシュの数を見れば一目瞭然である。今では、住宅地の庭木にも来るようになった。

巣箱をよく利用する。作成の際は、入口の直径は28mm、向きは南東でやや下にかしぐ、取付位置は３m程度、そこまでネコが上れないように横枝等ないこと（壁に設置し成功した例もある）。取付時季は３月までに。留鳥。　（山部直喜）

鳴き声　ツーピーツーピーまたはツーチー、ジュクジュク

特徴：留鳥、全長14.5cm。スズメくらいの大きさで、オスとメスが同じ色をしている。ほほのあたりが白く、胸から腹までネクタイ状の黒線がある灰色の鳥。オスの黒線は太くてはっきりしていて、メスは細く薄くなっている。庭は公園で見られ、昆虫や種子を食べ、巣箱などによく巣をつくる。



14年度のみ報告あり
24年度のみ報告あり
14・24年度報告あり

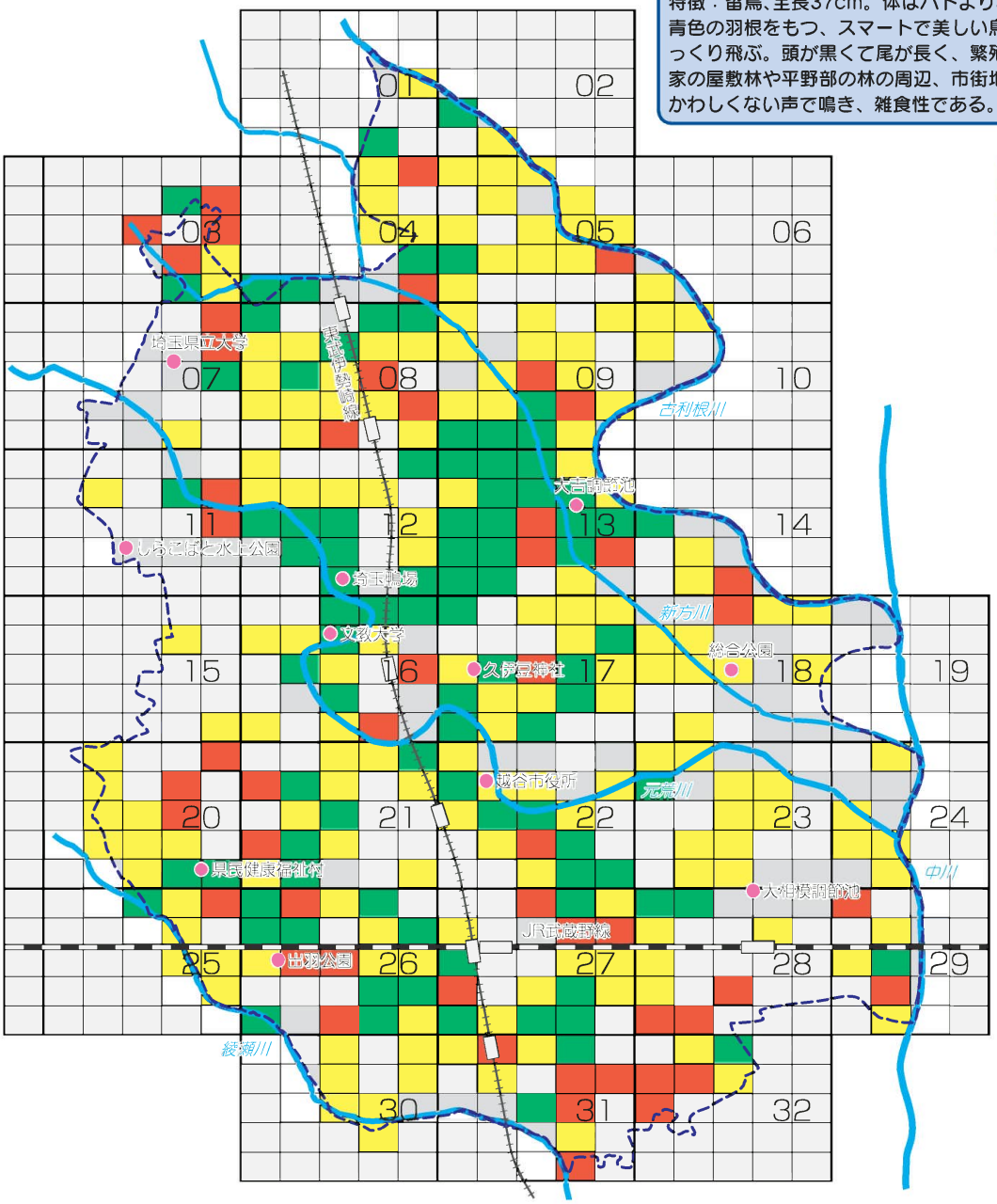
27 オナガ …… カラス科

世界的に見るとスペイン・ポルトガルがあるイベリア半島と極東地域に分布する。日本では本州の東半分に分布し、関東地方と長野県に多い。越谷では、下の分布図のように、東武伊勢崎線（スカイツリーライン）の東側ではほぼ全域に、西側でも2/3に分布している。

さらに細かく越谷での分布域を見てみると、多くが人家周辺の明るい林で観察されている。実際に歩いてみると、樹木が連なる屋敷林や大きな公園である。特に、大吉調節池から逆川を通って久伊豆神社の地域、そして文教大学から宮内庁埼玉鴨場の地域でよく観察されている。

調査報告は、平成14年度「145メッシュから296件」、今回「261メッシュから795件」と増加している。留鳥。

（山部直喜）

鳴き声　グェーイグェーイ、ギュイギュイ

特徴：留鳥、全長37cm。体はハトより小さいカラス科の仲間だが、青色の羽根をもつ、スマートで美しい鳥。翼を広げて浅い波状にゆっくり飛ぶ。頭が黒くて尾が長く、繁殖期以外は群れで生活し、農家の屋敷林や平野部の林の周辺、市街地でも見られる。外見に似つかわしくない声で鳴き、雑食性である。